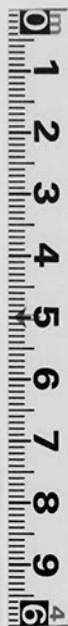
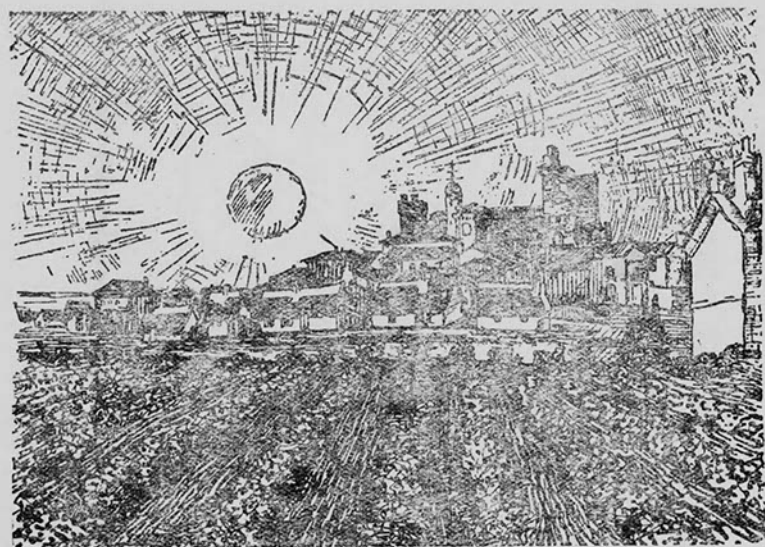


彼等自身

創刊號



彼等自身



第一一年

十一月號

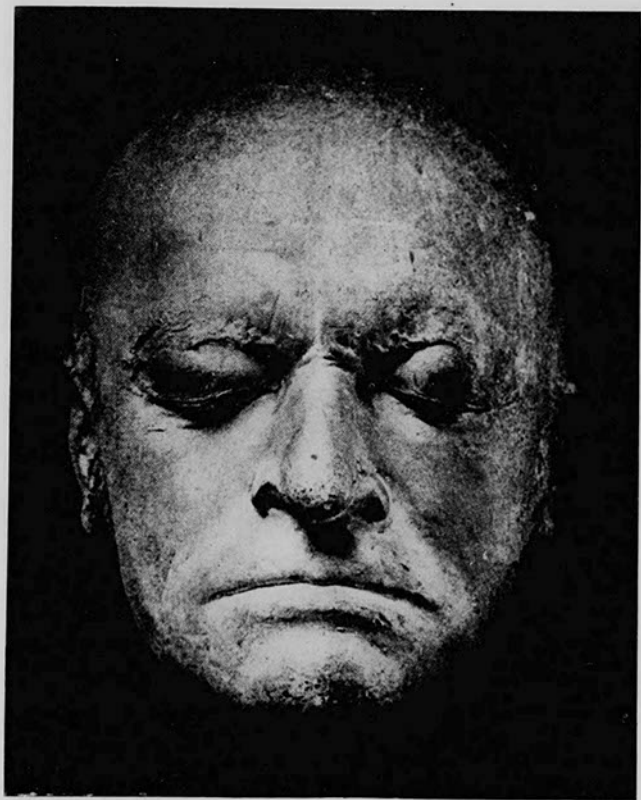


彼等自身 創刊號目次

クネルゲ博士の最後 (小説)	ヘルマン・ヘッセ 日野捷郎 譯	一
結婚後六ヶ月目 (小説)	木暮	八
左傾的文藝について (感想)	武者小路實篤	一四
沼のほとり (短歌)	小泉純一	一六
磐梯山遊草 (短歌)	逢原生	一八
譯詩帖より (詩)	故 渡邊康夫 譯	二〇
朝 (詩)	エルンスト・トルレル 土方定一 譯	二五
短詩十九篇 (詩)	津川公治	三三
トコトコが來たと言ふ (詩)	土方定一	四〇
六號雜感	津川公治	四三



六號雜記	小林剛
挿繪解説	
表紙 (レリーフ)	ゴーガン
扉繪 (エッチング)	ゴッホ
目次カット	後藤清一
挿繪	
ブレイク面型	デブキル
ハアゼンクレエフエル「息子」	ライベルト
ストリントベルク「爛醉」	エドワード・サール
灰色のマドンナ	メルツェル
桃源	小川芋錢 後藤清一 (刻)



クネルゲ博士の最期

ヘルマン・ヘツセ
日野捷郎 譯

前高等學校教授博士クネルゲ氏は、早く職を退いて以來、獨りで言語學の研究に身を委ねてゐた。博士は嘗て呼吸困難症とロイマチスとのために、或る菜食的節食療法を執らされたことがある。もしそれがなかつたら、決して菜食主義者や菜食主義と接觸するには至らなかつたであらう。然るにその療法が著しい成果を収めたので、それ以來此退職學者は毎年數ヶ月を、主に南方の或る菜食療院か或は菜食の下宿で費すやうになり、從つて何でも異常なこと奇妙なことが大嫌ひなのに拘らず、自分と肌の合はぬ集團や個人と交際せざるを得なくなつた。さういふ連中が稀に退引ならず自分の故郷に訪ねて來るのを博士は甚だ好まいのであつた。

永年の間博士は春と初夏とを、或は又秋の幾月かを、南フランスの海岸やラゴ・マツデヨオレの畔に澤山ある居心地の好い菜食下宿で暮して來た。さういふ土地で様々な人間を知り、様々な物に慣れた――跣足で歩くことにも、長髪の使徒にも、斷食の狂信者にも、それから菜食的の美食家にも。この最後の人達の中に博士は大勢友達を見付けた。そして自分も病氣のために重たい食物が段々攝れなくなつて來たので、野菜や果物の方面でさゝやかながら一人の美食家に成り済ましたのである。博士は決してどんな花ぢさでも喜んで食べるのではなかつたし、又イタリア産のオレンヂの代りにカリフォルニア出來ので済ますやうなこともなかつた。が、それ以外には

もと／＼自分に取つては單に一つの療法にすぎぬ菜食主義といふものを、あんまり氣に留めではゐなかつた。まあ精々折に觸れて、此方面の色んな面白い新造語に興味を感ずる位のものであつた。それは言語學者たる博士にとつて奇妙と思ひのするものばかりだつた。――菜食者。菜食家。菜食主義者。生食者。果食主義者。混食者。

博士自身は専門家の用語法に従へず混食者に屬してゐた。果物や生物ばかりでなく、煮た野菜も攝れば牛乳や鶏卵の入つた料理さへも攝るからである。そんなことが眞の菜食家達、殊に規律の嚴格な純粹の生食者達から堪らなく厭がられることを、博士は知らないではなかつた。併しかういふ兄弟達の狂熱的な信仰上の論争にはなるべく近寄りぬやうにして自分が混食者階級に屬するといふことは只行爲の上だけで示してゐた。他の連中、わけてもオオストリア人などは、自分の所屬を名刺にまで刷り込んで得意になつてゐたのである。

前にも書いた通り、クネルグはかういふ人達とあまり肌が合はなかつた。その温和な血色の好い顔と

ゆる國々の菜食主義者達殊にフランス人の間に、幾人も温良な血色の好い友達を見出した。彼等の傍にゐれば、軟らかなサラダ桃などを、誰に咎められることもなく愉快な食卓の談笑裏に平げることができたのである。平生なら戒律を嚴守してゐる狂熱家に混食を責められたり、米ばかり嚙つてゐる佛教信者から宗教に冷淡なのを非難せられたりするものであつた。

するとその頃クネルグ博士は始め新聞によつて次に知人達からの直接の報道によつて、國際的菜食者組合の規模を創立を聞知つた組合は小アジアに宏壯な土地を手に入れてゐて、そこに訪問的或は永住的に居をトすることを、世界の同志に向つて割引値段で勧誘してゐるのである。それはあのドイツ、オランダ及びオオストリアの菜食家から成る理想主義的團體の企てであつた。彼等の運動は一種的菜食的汎ユダヤ主義で、その志す所は自分達の信仰の追隨者や歸依者のため、世界のどこかに自治的に管理せられた自分達だけの國を、しかも其自然的條件が自分達の理想として描いてゐる生活に適するやうな國

肩幅の廣い姿だけでも既に、純菜食主義の大抵は瘦せこけて禁欲的な眼付の、往々突飛な服裝をした他の仲間達とは、全然趣を異にしてゐたのである。さういふ連中は殆んどみんな長い髪を肩を越すまで伸ばしてゐて、銘々自己特有の理想を狂熱的に信條的に又は殉教的に奉じながら世を渡つて行くのであつた。言語學者であり愛國者であるクネルグは、自分と同じ菜食家達の人類的な考へや社會改革の思想にも、又風變りな生活法にも賛同しなかつた。そんな風だつたから、方々の停車場とかロカルノやパレンツアの船着場などでは普通のホテルの客引が、平生ならどんな「菜の使徒」でもすぐ遠くから嗅ぎ付けるくせに、この博士には平氣で宿を勧めた。そしてこのきちんとした身なりの客が、タリイジアとカツエレスといふ菜食下宿の小使が、でなければモンテ、ゴリタの驢馬曳きかに鞍を渡すのを見ると呆氣に取られて了ふのであつた。

それでも博士は時と共にこの妙な周圍を居心地よく感ずるやうになつた。樂天家―いや殆んど聰明な享樂家だつた彼は、かういふ場所に訪れて來るあら

を獲得しようといふのである。小アジアでの建設はその手初めなのであつた。彼等はすべての菜食的及び菜食主義的生活法、裸体教育並びに生活改善の同志達に向つて檄を寄せた。檄は大いに頼母しい且景氣の好いものだつたので、クネルグ博士も此樂土から響いて來るなつかしい調べに耐へ切れず、次の秋そこを訪問する旨を申し出た。

その國土は驚くべき美味な果物や野菜を驚くべく豊富に供給する筈であつた。其本部の料理場は「樂園への道」の著者が指導してゐた。そして皆が殊に愉快に思つたのは、そこへ行けば意地悪な世間の嘲弄を受けることなく心安らかに暮せるといふ事情であつた。どんな種類の菜食主義及び服裝改良運動も悉く許されてゐた。禁ぜられてゐるのは只肉類と酒精を攝ることだけであつた。

そこで世界のあらゆる部分から色んな變物がそこへ逃げ込んで來た。或者はこの小アジアで遂に安息と愉快とを己の性質に協つた生活裏に出さうとして、又或者はそこに押寄せて來る治療渴望者達の懷から利得と生計の資を絞らうとしてやつて來た

のである。其中にはあらゆる教會の職を追はれた牧師や教師がゐる。質のヒンヅウ教徒がゐる。心靈教徒、語學教師、マツサアジ療者がゐる。催眠術師、魔術師、祈禱療者がゐる。この奇矯な人達の小團はすべて山師や惡黨といふよりも寧ろ惡氣のないけちな詐欺師どもから成立つてゐた。別に大した儲けは得られないのだし、それに又實際大概は自分の糊口の資を求めるだけで別に他意のない人達だつたのである。しかも生活費は南方の國々の菜食者にとつては非常に低廉なものであつた。

これらは悉くヨオロッパやアメリカで脱線した人間で、大抵は多くの菜食家に特有な仕事嫌ひを唯一の惡徳として身に付けてゐた。金錢や享樂を望むのでなければ、權力や愉悅を願ふものでもない。只何よりも先づ仕事や煩ひなしにあとなく暮し得ることを希つてゐるのであつた。中には比較的富裕な同志の家であとなく屏の把手を磨いたり、或は豫言者になつて説教をしたり又は山師醫者になつたりしながら、ヨオロッパ中を何度も歩いて廻つた者もかなりゐた。クネルグはこのクキジザアナに来て見て

以前時々のかきな物乞ひになつて自分をライプツイヒに訪ねて來たことのある古い馴染を大分見出したのであつた。

併し何よりも先づ彼は菜食主義のあらゆる倉庫から出て來たやうな偉人英雄に遭遇した。日に焼けた男達が長く波打つ髪や髯を生やし、白いアラビア風のマントを着、サンダルを穿いて、舊約聖書中の人物の如く闊歩してゐる。薄色のリンネルの運動服を着てゐるものもあつた。えうさうな様子の男達で、手編みの木の皮を腰に巻いたり裸形で歩いてゐるものもあつた。既に團體だの組織的な協會だのまで成立してゐて、或個所に果實主義者が集まると、一方の場所には禁慾的斷食主義者が集まり、もう一つの所には見神論者或は拜光教徒が集まつた。アメリカの豫言者ダダスの崇拜者が一つの神殿を建てれば、スエデンボルグ宗の人達は禮拜のために一つの食堂を用ひるといふ風だつた。

この風變りなごた／＼の裏に、クネルグ博士は始めのうち何となく堅くなつたやうな氣持で動いてゐた。彼はもとバアデンで學校教師をしてゐたクラ

ウベルといふ男の講義に出席した。其男は純粹のアレマニ語でアトランテイス國に起つた出來事を地上の諸民に教へ、更にヨオギ・ボスヒナングといふ人物を嘆賞した。それは本來ベツボオツイナアリといふ名で、何十年の努力の結果、己の心臓の鼓動を隨意に約三分の一だけ減らすことに成功した人物なのださうであつた。

もしこれがヨオロッパの産業政治生活の營まれてゐる只中であつたら、此移民團は恐らく癡狂院から出鱈目な茶番かのやうな印象を與へたことであつたらう。所がこの小アジアではすべてがかなり尤もらしく見えて、飛んでもないやうな氣持は決して起さぜんかつた。新にやつて來た人々が、自分達の平生の夢想が今爰に實現せられてゐるのを見ると有天頂になつて、顔を精靈のやうに輝かせたり嬉し涙に咽んだりしたまゝ、花を手持つて逢ふ人毎に平和の接吻を與へて挨拶しつゝ歩き廻つてゐるのも時折見受けられた。

が最も目に付くのは何といつても例の純粹の果食主義者の連中だつた。彼等はあらゆる種類の禮拜堂

とか家とか團體とかいふものを拋棄して、唯偏に益々自然的にならうとする彼等の表現に従へば「益々大地に近づかうとする」ことのみ努力してゐた。青天井の下に起臥して、樹か灌木から取れるものの外はなんにも口にしない。そしてあらゆる他の菜食主義者達をひどく輕蔑してゐる。其仲間の一の如きはクネルグ博士に眞向から宣言したものである。米やパンを食ふのは肉類を食ふのと何等撰ぶ所なき醜行であるし、ミルクを飲むやうな所謂菜食家と世間の呑助やのんだくれとの間に自分は何の相違をも見出すことはできぬ。

果食家の中では、この思潮の最も徹底的な且最も成功せる代表者たる、畏敬すべき兄弟ヨナスが嶄然と頭角を現はしてゐた。腰布を着けてゐるにはゐるが、それは毛むくぢやうな褐色のからだと殆んど見分けが付かない。小さな森の中に住んでゐて枝から枝へ器用にすばしく渡つてゆくのがよく見受けられた。彼の手と足の親指は驚くべき退化の途上にあつた。要するに彼の全性格、全生活は吾々が考へ得る限りの最も頑固な最も優秀な自然への復歸を表はし

てゐたのである。口の悪い二三の者は私かに彼をゴリラと叫んでゐたが、併しそれを除けばヨナスはこの部落中の嘆賞崇拜を擅にしてゐたのであつた。

言語の使用をこの偉大な生食主義者は既に廢してゐた。兄弟姉妹達が彼の森の傍で語り合つてゐる時など、彼は折々みんなの頭上の枝に腰を掛けて勵ますやうにや／＼したり、意に添はぬやうに高笑ひをしたりする。が決して口を利くことはなく、自分の言葉は自然の的確な言葉であつて、やがてはそれがすべての菜食家と自然人の世界語になるだらうといふ意味を身振りで以て暗示しようとするのであつた。彼の最も近しい友人達は毎日彼の許に集つて咀嚼術や胡桃の皮むき術に就て教へを受け、彼が益々完成に近づいてゆくのを恐れ入つて眺めてゐた。併し皆は間もなく彼を失つて了ひはしまいかと心配した。恐らく近いうちに彼は自然と合一して了つて、故郷なる山間の荒野へ引込んで了ふだらうと思つたからである。

幾人かの熱心家はこの讃嘆すべき人物——生命運の終極に達して、人類生成の出發点に立返る道を

發見した此人物に、神としての尊敬を捧げようといふ發議をした。然るに或朝の日の出頃この目的で例の森を訪ねて行つて、先づ歌を歌つて儀式を始めた所、祝はれる當人はいつもの大きな枝に姿を現はして、ほどいた腰布を茶化すやうに振り廻した揚句、崇拜者達に堅い松笠を投げ付けたのである。

この完成人ヨナス、この「ゴリラ」をわがクネルゲ博士はその謙讓な魂の底から嫌つてゐた。菜食的な人生觀や狂信的に突飛な性格などの癡り固まりに對して、博士が今迄無言のまゝ心の裏に懷いてゐたものすべては、この人物となつて怖ろしく博士に迫つて來て、その上博士自身の煮え切らぬ菜食生活を鋭く嘲笑するやうにさへ思はれたのである。この寡欲な退職學者の胸の裏に、人間の品位は侮辱を感じて起ち上つた。だから是迄は自分と考へを異にする人達はいくらでも靜かに辛抱強く我慢して來た博士も、この完全人の糖家を通りすぎる時には、いつもこの男に對する憎惡と憤怒とを覺えずにはゐられなかつた。ゴリラの方でも、今迄は同主義者をも崇拜者をも批評家をも平靜にその枝の上から眺めてゐた

のに、この人間に對しては、その憎惡を本能的に嗅ぎ付けたのであらう、段々と烈しい動物的憤激を抱くやうになつた。博士は通りかゝる度に、咎めるやうに憤慨したまなざしで此樹上の住人をじろ／＼睨付ける。するとゴリラは返答として齒をむき出した、疳癪を起したやうにふう／＼唸つたりした。

クネルゲはもう次の日には此部落を去つて故郷へ歸らうと決心してゐた。所が或明らかな満月の夜一寸をどろ歩きをしてゐるうちに、殆んど我知らずいつか例の森の近くへ來て了つた。博士は憂鬱な氣持で以前のことを考へてゐた。あの時分は俺もまだ完全に健康で、肉食してゐる普通の人間として同じ仲間と一緒に暮してゐたのだが。そして博士は今より幸福だつた歳月を追想してゐるうちに、思はず

或る古い學生歌をぼんやり口笛に吹き始めた。とその時がさ／＼音を立て、茂みの中から森の住人が現はれた。歌の調べのために昂奮して氣が荒くなつてゐる様子である。彼はごつ／＼した棍棒を揮ひながら威嚇するごとく散歩の人の前に立ちはだかつた。不意を打たれた博士は併し烈しい憤怒のあま

り、逃げ出す所か、愈々この敵と總勘定をすべき時が來たと思つた。憎さげな微笑を含んで博士は一掛し、聲に籠められるだけの嘲弄と侮蔑とを籠めながらかう云つた。

「御免下さい。私は博士クネルゲです。どうかよろしく。」

するとゴリラは怒りの叫びと共に棍棒を投出すや否や、この弱い人間に飛び掛つて、忽ちのうちに怖ろしい兩手で彼を絞め殺して了つた。朝になつて博士は見出された。中には事の真相を察した者もあつたが、併し誰一人この猿人ヨナスをどうかしようとする勇氣のある者はなかつた。ヨナスは恬然として枝上に胡桃を剥いてゐるのであつた。此異國の博士が樂園に滞在中獲得した僅かな友人達は、その附近に彼を埋めた。墓に立てられた簡單な標には次の短かい銘があつた——

「博士クネルゲ。ドイツ出身の混食者。」

結婚後六ヶ月目

木　　暮　　亮

八

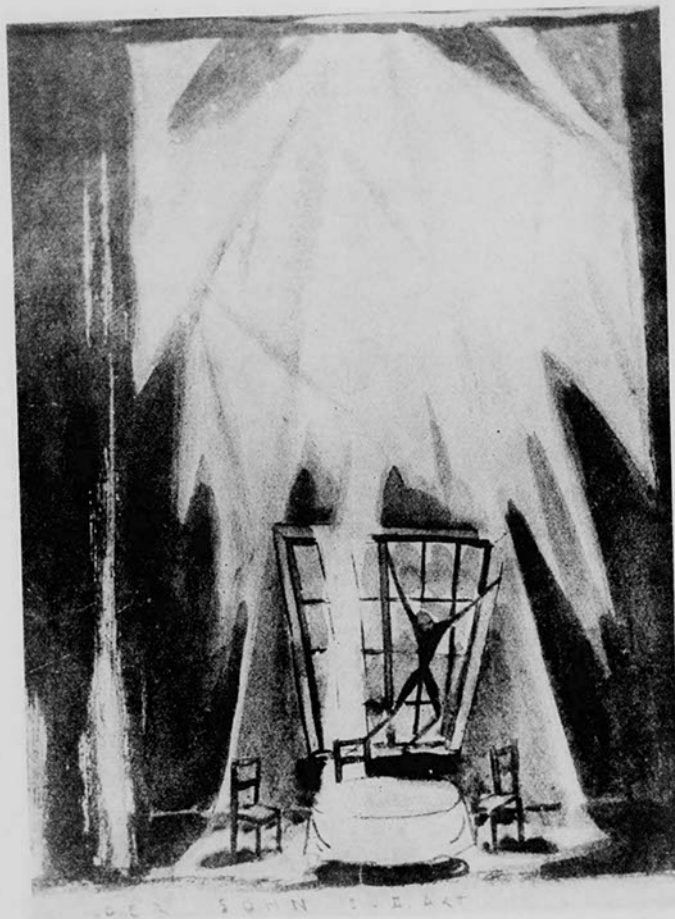
切符を買つて、急いで改札口に行くと、自分の前を青地のセルの單衣に袴をつけた女學生が早足に歩んで行く。久能木がふと、糸崎さんかもしれないと思つたが、その考はすぐ消えてしまつた。糸崎さんは彼の細君の女學校時代の友達で、一度彼等の新しい家を訪ねて來たことがある。彼はその時一寸顔を合せて話したにすぎなかつた。

久能木も急ぎ足だつたので、その女學生との距離が段々せまくなつた。後姿の良いその若い女からうける一種の壓迫感から、妙に緊張した氣持で、大急ぎでそのわきを通りすぎずにゐられなくなつて彼は陸橋の端れの所で漸くその女學生を追ひ越し、大股で階段をおりた。

ブラットホームについてから、彼は、すぐにも振

り向いて、自分の心をそれまで波うたせたその女學生の顔を見ようと思つたが、さうした露骨な態度はわれながらいかにも淺ましい事に思はれて、そのまゝ何げない風で、大股に、力強く、ブラットホームの向ふの端れまで歩いて行つた。脇に抱かへた大型の黒革の鞆をしつかとくへ、心持空を見あげながらである。而して端まで行くといかにも自然らしく廻れ右をした。

先の女學生はブラットホームの中の待合室から少し離れた電柱のわきに立つて、頻に顔の汗を拭つてゐる。かなり整つた目鼻立に兩頬がぼろと赤味を帯びて、餘計ひきたつて見えた。去年の秋結婚して以來、殆んど若い女に對する興味を失ひかけてゐた彼も、此の女から視線を離すことを心残りに思つた



それで、電車は恰度出たあとらしくかなり間があつたが、その間、彼ははたの人々からもまたその女からも氣づかれぬ様に要心しながら、その顔を偷み視てゐた。

やがて電車が着いた。久能木は下車驛の關係からいつもなら最後の車輛を待つのであつたが、暫く躊躇つた。その女が他の車輛に乗りこんだらその方に移らうとまでは考へなくとも、同じ車輛であつてくれれば良いと願はずにはゐられなかつたのである。ところが後の方の入口から乗りこんだ彼の隣に、前の入口から乗つた同じ車内を此方に歩いて來る彼女の姿が寫つたのである。彼は、空席がなかつたので二人共五つ六つの吊革を隔てて立つてゐた。

次の停車場に着くと、彼女の一人をいた前の客が下車して空席が出來た。久能木は彼女がその空席を占めてくれれば良いと思つた。が、彼女は腰掛けようとはしなかつた。その隣に立つてゐた肥つた女學生が腰をおろした。と、その女學生の仲間らしい向ひ側に腰かけてゐたその女學生が何やら饒舌つたかと思ふと聲高に笑つた。いま腰掛けた女學生に關係

があるらしい。彼女はまもなく立ちあがつて、自分をも耻かしさうに笑ひながら仲間の腰かけてゐる方の吊革を掴んだ。セルの着物の女がいま出來た空席に腰かけやうとしなかつたので、久能木は二三人の人の先を越して行くのは、少々心に耻ぢたが、急いで行つてそこに腰をおろした。

「久能木さんでいらつしやいませんか。」

彼は腰をおろしてやがてセルの女の顔を見あげやうとした刹那、頭のあたりで自分の名を呼ぶ若い女の聲を聞いたのであつた。

彼はあはて、顔をあげた。

まぎれもない糸崎さんが、耻かしさうに頬笑み乍ら、自分を見おろしてゐる。面長な面もひきしまつた顔、深い可愛い唇、肉付のいゝ兩肩、彼は何うして最始からそれに氣がつかなかつたのだらう。

「おや、どなたかと思つたら……。」

久能木はあはて、立ちあがつて頭をさげたが、それまで言ふと言葉がつまつた。糸崎さんはさつきから自分に氣がついてゐたかもしれないと思ふと顔がほてつて來た。

「……つい気がつきませんでしたので……」
 てれかくしに彼はさう云つたが、心持ちか自分の
 耳には鋭く響いた。

「あの、あたしさつきからよく似ていらつしやる
 方だと思つて居りました。が……」

久能木の言葉を受けてさう言ひ終ると、彼女は彼
 から目を外した。

「さうでしたか。それはどうも失禮しました。」

と早口に言つて、彼はポケットから手巾を取り出
 して顔を拭つた。出た積りの汗はしかし手ごたへが
 なかった。拭ひ終るとそれをまたもとのポケットに
 いれ今度は鞆をもちかへ、それから左の手の中の吊
 革をぎい／＼力をいれて引張つた。

「学校のおかへりですか。」

彼は顔の筋肉の硬りを意識しながらも、強いて落
 ちつきを装つて訊ひた。

「え、一寸お友達の方に寄りましたものですか
 ら。」

糸崎さんが彼の細君の安否を尋ね、一通の挨拶が
 すむと、彼は彼女に空いてゐる席をすゝめた。

「ありが度う御座います。でもわたしこの次であ
 りるのですから、何卒おかけなすつて。」

然し久能木は間の悪さを避けやうとして腰かけな
 かつた。

「此の間、花月園にいらしたさうで御座いますね。」

三重子様から御手紙をいただきましたの。いま頃は
 何ほどか結構で御座いますね。」

久能木が早く電車が次の停車場について、此のて
 れかくしから自分を解放して欲しい様な、またそれ
 とは反對に斯うした快き間の悪さかの中にもつと長
 くゐない様な、さつきからの事を考へると冷汗が出
 さんなのでそれとはなしに窓の外を見てまぎらはし
 いゐるところではない調子で糸崎さんからさう話
 しかけられたのである。

「え、三重子の両親達から誘はれたんですから
 ……」

それから暫く花月園の事や、彼女の學校の話をし
 てゐる中に、彼は糸崎さんが自分よりも遙かに落ち
 ついてゐるのを認めないわけにはゆかなかつた。相
 手が既婚の男な爲めであらうか、此の頃の女學生は

のかい。」

「い、何だか、気分がすぐれて、それに、母が
 尋ねて來ましたのよ。今日は、お父様の誕生日だつ
 て、おはぎを持つて來て下さつたの。」

「お母様が訪ねて來たから、元氣が出たと言ふわ
 けかな。」

「さうぢやありませんわ、母が訪ねて來た時、ち
 やんと起きてゐたんですもの。」

「ぢや、お母様も驚いたらう。」

「い、喜んで行きましたわ。――さあ、早く着換
 なさつて、頂きませうよ。」

「此の儘だつてい、ぢやないか。」

「いけませんわ、窮屈ですもの、――さあ、持つて
 來ましたから。」

久能木は、しようことなしに、と言つた容子で長
 火鉢のそばから立ち上がった。

「あのね、おれも今日は珍らしい人にあつたんだ
 よ。」

「珍らしい人つて、どなた？」

細君は、夫に着物をかけてやつて、帶を手渡すと

みんな斯うした落つきを以て若い男と話すのだから
 うか、而してさつきからの自分の態度を何んな風に
 思つてゐるのだらう。彼は心中にそんなことを考へ
 てゐたので、よけい落ちつかなかつたかもしれない

「おひまの時に遊びにいらつしやいませんか。此の
 頃日曜なら大抵家に居りますから。」

間もなく次の停車場に近づいて彼女が降りようと
 した時にさう言つたが、言ひ終ると、彼は自分の友
 達にでも言つてゐる様な口振りに氣がついて變に氣
 が咎め、あはて、三重子も喜ぶでせうからと附け加
 へた。

糸崎さんは降りてからもう一度、窓から首を出し
 てゐた久能木に頭をさげて、すぐ人込の中に吸ひこ
 まれた。

久能木が家に歸ると、此の頃ひどい悪阻で、何方
 かと言へば、床づき勝ちでゐた細君が、かなり血色
 の良い頬に笑を浮べながら、しやんと梳つた頭を下
 げて、迎へて呉れた。

「今日はいらい元氣だね。そんなにしてゐてい、」

上衣を洋服かけにかけ乍ら、訊いた。

「あて、御覧、ほんとに思ひがけない人なんだよ」

「どなたかしら……澁谷の小母さん？」

「澁谷の小母さんなんか、ちつとも珍らしくないぢやないか。」

「ぢや、小原の姉さん？」

「あんな、いつも来る人ぢやない、つて言つたら

！

「ぢや、どなたですの、わからないわ。」

「糸崎さんにあつたんだよ、糸崎さんに！」

「ほすとう？ 糸崎さんに？ まあ、何處であひになつて？」

「びつくりしたらう。おれもびつくりしたよ。」

「でも、何處で御あひになつて？」

「歸りの電車なんだ。」

「まあ、いま頃、学校の御歸りかしら、どんなな

りをしていらして？」

「学校の歸りらしかった。友達を訪ねたから遅い

んだつて辯解してゐたつけ。」

「さうを、わたしもあひたかつたわね。あれから

随分になりますもの。でも、よくおわかりになりま

したのね。」

「それがさ、頗る赤面の至りなんだよ。さゝ度い

？」

「まあ」

「ほんとう。」

「ほんとうつて、早く、あつしやればいゝのに。」

久能木は、糸崎さんのあとを追ふて行つた自分を

誇張して話した。

「俺が急いで行つて、その空いた席につくかつ

かぬ中に、久能木さんぢやありませんか、と呼ばれ

たんぢやないか。ほんとうにひや汗が出たよ。」

「まあ」

三重子は、耻かしさうに、またあかしさうに、笑

つた。久能木は、その笑を、心の中で鋭く見つめて

ゐた。

「お前のことを、色々きいてゐたよ、糸崎さんは。

花月園に行つたことをお前手紙に書いてあげたね。」

「いえ、何んとか言つて居て？」

彼女の聲は澄んでゐた。

「あゝ、羨しい、つて言つてゐたよ。」

「まあ、いや―それから何と言つて？」

「その中に、池袋に来てしまつたのさ。そんなに

話なんか出来ないよ。」

「訪ねて来て下さる様に、言つて下さつて？」

さう言つて自分をのぞき込んだ妻の眸を見ると、久

能木は、身体がぼうと熱くなつて来て、自分がさう
糸崎さんに言つた時の耻かしさが、思ひ出されたが
それと同時に、今まで身に添はなかつた自分が、自
分にふと戻つて来たような、ほつとした氣持になつ
た。――一四、一〇――

左傾的文藝について

武者小路 實篤

本心からならば、反抗的精神にしても、社會主義的な感情からにしても、かまわぬと思ふ。主義と文學とは別物であるが、その交渉が強くて、分離し得ぬ人が、やつてゐるなら、かまわぬと思ふ。しかし、それを道具に用ふのは面白くない。

今の日本の文學で、左傾的のもので、それが判きりわかるのは、自分は未だ見た事がない。或る時は正直でも、主義が重になると、無理が入つて来て、事實に正直と云ふよりも、結論に急ぐやうになつてゐる。

一体、社會主義は實行のもので、文藝を利用する傾があると思ふ。畢竟、唯物主義等は文藝と矛盾してゐると思ふ。文藝は精神的のもので、物質に影響されると、文藝に對する考へがぐらついて、それに對する信仰や愛を、強く持てない傾がある。で唯物主義の人は眞の文藝に近ならず、何處か徹底せぬ所があるのでないかと思ふ。

これでは判きりせぬが、眞のプロレタリアの人が書いて、それが自づと社會主義的になる場合は、勿論、立派な文藝にならうが、そうでないと、左傾的のものは、人生に或る傾を持つて見る事になり、その形が一定になつて来て、わかり切つた事を、何度もくり返すことになる。同じ派の人が前に云つた事を、幾度も書いてたりしてゐる。一体、文藝は他の人が入れぬ所へ、入り込むのがいいので、他人が云つた事なら、その人に

委して置けばいい。前田河廣一郎にしても、小川未明にしても、千變一律の所が多く、そしてすぐ議論に陥つてゐる。その議論も多くは、前にくり返へされたものが多い。しかも、それを他人に強ひてゐる。そして又、心の微妙な矛盾の面白さが出てゐない。文藝はそんなものでなく、他人の感じられぬ所を、書くのが創作で、他人の云つた事を、再び云ふ必要はない。

唯、主義のために勝手に作つたものは、眞の創作か否か疑はしい。日本の社會主義的作品が面白くないのは、主義の方が先に出て、實感がその後になつてゐるからである。しかし、前にも云つた様に、眞にそれによつて書かねばならぬ氣持であるならば、それもいゝと思ふ。

——村山知義について

自分は、村山の作品は、築地小劇場の背景と、その他二三の作品しか知らないから、よく判らないが、村山は才はあるが、思ひつき以上にあまり出てゐない様に思ふ。藝術としても、作品は面白いだけで、遊び半分である、餘韻があり過ぎるやうに思ふ。自分の頭髮を伸してゐるのも、モンナ・パンナに出て来るバーシエの感が好きで、やつてゐる様に云つてたが、すべての點で興味中心のやうに思ふ。

脚の片方が太くて、他が細いやうなさし繪も見た事があるが、一寸面白いが、必然さもなく、思ひつきにも深さがあるとは思へない。判らない様なものでも、尊敬せずに見るとすぐ判る。あの面白さでは細工が判つてしまへば、それまでである。今の行き方で、何處まで行くか疑問である。何處かで目がさめ、今迄の自分の仕事がいやになる時が來さうに思ふ。(一九二五、一〇、二一—談)

沼のほとり

小泉 純一

一六

春の雨のしくしくふればこの沼にやうやくわれは住みつかんとす

新芽立つ若松山ののぼり路にいきてしばし汗のごひたり

春日につかれて歩みし松山は夕陰ひくく汽車より見ゆる

たまさかに一日の遊行はてにける夜はなごみてとく眠りをり

栗の花あかるみながくのこりゐてそよぎしかげも夕さりにけり

夕方の雨あがりゆく沼ぬちにかへるうまるるけはひたそすれ

雨あとのおぼほしき夜にかりそめのかかはりに過ぎし人おもひをる

あめしづくいまだつづける庭さきに梟なくは月いづらし

宵やみの雨後の地面にあり立ちてふくろふさげばものこのほしさ



湯あがりの夕けすまして縁にをれば月が出たでた向ひの丘に
月かげのしみ入りしみ入る庭草をふみめぐるなり子をだきながら
廣沼のひむがし明くるかげ見えてあふれくるもよこの朝霧は
朝目よくたばこのみつつわがをれば霧はながらふゆらぐ木末に
秋づける沼べに朝のきりながらあをき葡萄を採りてきにけり
朝なさな露のそこひに目ざめゐるこほろぎは吾がいのちなりけり
唐黍の立ち枯れつづく畦道をこころつかれて今日もあゆめる
ま日あちてこの沼岸の木ぬれにはえだうつりする梟のかけ
木たかき松にむれたるむく鳥は夕もやふかくねむりゆくらし
ぬさとりし松葉牡丹のあとどころ雨しととと園さびにけり
四五本の鶏頭さびてこのごろのくもりをふかく家にこもれり

磐梯山遊草

(舊稿を録す)

逢原生

時雨雲凝りて動かず長庚のきらめきをむる那須の高原(草中二首)

白雲のしきりに飛びて高山のいただきに照る月を掠むる

月照れる裾野を行けばさやさやと流るる水の澄みてひびくも

月影のあまねく照れる楚樹原草枯に鳴く蟲のかそけき

月影にしづもり立てる磐梯の山のかしこまなかひにして

火の山とかしこみ思ふ磐梯はしづもり立てり今日の月夜に

いただきにたゆたふ雲を火の山の烟かとする月の明きに

山本のいでゆの宿のうす衾引きかづきつついねがてに居る

草山の紅葉が中に所々石あらはれて秋日に光る(翌朝登山)

いただきゆ山腹かけて溶岩の直路しるし見るに足萎ゆ

磐梯の山腹にして見放くれば雲の海なり會津國原

眼下なる四方つ國原五百重なす雲の白波立ちかくしけり

岩が根に取りつきしまゝ足なえて立ちすくみけり荒山路に

眼の下に猪苗代の湖ひろこれり岸に並み立つ松うつくしき

迦具土の神のあらびのかしこさを崩えてそぎ立つ嶺に見るかな

こゝに見る檜原の湖はむら山のかげにひろがり瑠璃色なせり

るり色を湛えてこれの湖は静かなるかも高山のかげに

山かげの沼の平らは土濡り女蘿の生ひ蔓れる(下山)

譯詩帖より (遺稿)

渡邊康夫 譯

ウイルヘルム・クレム

回想

樹々は静寂とした緑のなかに倦みはて、立つ。
大空はまたいつしかにそれともわかぬ灰色に翳り
ゆく。

草の葉のはてしもなさが
幾千と知らぬさゝやかな刃となつて勝ちほこる。

ほんにわれらがこよなきものと愛でたのは何んだ
つたらう？

徳義なんどは、もう夙うに、「解り切つた」とすば
める肩の

その下に色を失ひ、名聲はまたほんに果敢なし。
何びとも自由の身にはしてくれず。
智慧は氣鬱のなかに溺れる。追憶はまたはかなく
失せる。

こよなく惜しいものまでも。懊惱からの解脱でさ
へも。

さて不可思議にまたおぼつかぬ、
それかとも聞氣遠げのものゝ響もいつしかに絶え
ただくすしさの愛のみ残る、

なかばは女、なかば星、

おぼろ／＼の心の上に、消をもえやらぬ纖弱しさ
にちのゝささやぐ

さながら永遠のひとしづくかとも。

そのひまに冬は又もや陸のさなかをひえびえと行

く。

空はまた上枝の上にいよゝ淋しくなりまざる。

さて西のかた、物憂の夢想者、たそがれのかへる

郷をば

深い太息の胸はさしむく。

アルフレッド・モンベルト

新殿の眞只中には

神殿の眞只中には青銅づくりの花瓶が立ち、
琢磨き立つたる天蓋の金鼻に影を反映りかへす。

そは海原をかい抱く。

その頭上には碧純色の屋蓋の

參宿星座が弧をえがく。

さてまた永久に開け放たれた扉のしきひには

冷涼の金光をした薄明のなかに、日と夜と、

契りをむすび、聲啼々と叫き交はし立つてゐる。

こゝにして静寂のなかに私は座してものを思はふ

ありとある人生のものさま／＼をわれとわが身の
邊りに積んだ。

かれ等一切光を放つ。

さてその上に私は廣大無邊のつばさを伸した。

私、靈異の夢の巨人像。

新世界方案

新世界方案

坦々と見る眼はるかに、際涯もない雪のひろがり

そのただなかにして透明な、廣大もない寒域。

その玻璃の塔のなかに一人の女を住まはせう。

焰と燃えるその髪の毛の榮光は

水晶の窓をつらぬき、雪のうえ

世界をわたつて照り下ろすのだ。

こは永遠にそのまゝでよい。

さりながら、一永劫に一度づゝ

陰崖ほどの身のたけを有つ一人の男、その乾坤の

はてしより

大地を踏んでやつて来る。

どつしりとした足取りで、一^ツ地もとどろに踏みな

らし、踏みならし、

鳴らし来たつて塔に入るのだ。

やがて上、鏡戸は閉ぢ、

大らかな、やさしげな手に錠が下りると、

それからの幾時こめて、無邊際なる墨暗が

世界の上にはたゞめき、唯見る一道の薄ら明りが

鏡戸の細い隙間を洩れるばかりだ――

して一切の上高く、悠々の人の血として凍えしむ

かとばかり、

ひとつ淋しい乾坤の涙のごとく私は懸り、

幾永却のその上におほひかぶさる。

神は創世の座より墮ちて

神は創世の座より墮ちて

生と愛とのすまひする

聲喧轟の廣間へ入つた。

篝火のかがやく所に座を占めて

かれはその眞赤な酒を飲む。

そこにしてよひどれの輩つどひ

ともく、に女を誇り奔放な海の氣象を誇る。

山なす雲は夜の星の冠飾る海をゆくとき

年經し月の隣人であり

主の偉大な勞役もまた

完璧無礙の王冠を被る。

クリスチャン・モルゲンステルン

冬の日よ

雪に掩はれた屋根や棚架や尖塔や

もつたいぶつたその顔に、白の頭巾の装束で

尼さんみたいにお前は黒い、冬の日よ。

どんよりとしたその眼差はあゝ死の様な灰の色。

ものうい、冷い、青白い火であれを見つめる。

そして曰ふ、全体そちの希望は何んぢや、さあ申

せ……。

階段の上には

階段の上にはあれの耳めが二つ坐つてゐる。

その乳を待ち遠しがる二匹の仔猫をつくりだ。

階段の上にはあれの心がうろんげに腰をかけ

妖怪小僧をつくり、顎を手に埋め、耳澄ます。

でも消息をもつて訪れてくるものはない。

耳はしひ、氣も精根も脱けはて、この室内に

あれはぢいつと横はる。手紙なんぞはもう要らぬ

薔薇色の小猫なんぞも、妖怪の小僧なんぞも。

イブン・ゴル

あくがれの隊商

とほくのびゆくわがあくがれの隊商は

つひに精女と樹立の蔭のオアシスを見出でもやら

ず、

愛はわれらが身をこがし、なやみの鳥は

絶え間もなく咬み、われらがむねをかきむしる。

あゝわれら知る、すじしき風といづみとを。

げに、ゆくとして樂園のあらざるなけむ。あゝさ

れどわれは迷ふ。とこしへにあくがれぬちを

うち迷ふ。

いづくならむ、ひとりの男、星をつかむと

窓よりおどり、はかなしやいのちを散らす。

あるひとはまた、おのが檻房のなかにして

蠟色の夢をもとめてそをいつくしむ。

さりながら、焦げしこゝろは思ひ／＼に「熱火の



國」ぞ。

あゝかのナイル・ナイヤガラなる洪流をもて、われ
らを葬がしめむとも、
なほさらにもの凄じき、飢え渴きもてわれら叫ば
む。

朝

エルンスト・トルラア

仲間

我等の足もとに耕されず横り
居る時の烟に在る年とは何だ
時とは何だ

墓地の歌

闘ふ者

お母さん、お母さん
何故あなたはそうでないか？

あなたの血で黒い夜

私に鼓動を與へ

敬虔な心から母と名づけることが出来ぬなら

私は遠い道を彷徨はう

お、刺のある水蠟樹を夢み

私がいつか、探すのに疲れずに

お母さんよ、あなたを見出せたなら

私自身が自分の母ではないか？

女よ、お前はかつて私に生命を與へて呉れた

私はあの日以来いくども死んだ

私は死んだ

自分を生んだ

死んだ

自分を生んだ

私は私の母となつた

進行曲

地の惱みに捧げられた
俺達、死への放浪者
最後を覺悟せる
俺達、花輪なき犠牲者

満足することのないある母親の報酬
苦惱になだめられた
俺達、希望なき子供

黙つて戦場に進む
俺達、女等の涙
俺達、光なき夜
俺達、地球の孤兒

朝

野戦炊事場だ

ねむり背の馭者は

朝を軋る

朝は重く

夜のもつれし肢を解き

その呼吸のうちに

山毛櫨はゆらく

光を浴びて

空は呼吸する……

青い霧がモント、ゼツクを蔽つてゐる

霧は散り

弔旗は散兵濠の上にかかつてゐる

人間の肢体よ

傷さ不具なる人間の肢体よ……

太陽が昇る……

砲手

星空だ

ねずみが道をひゅうひゅう横きつて飛んで行く

嵐が死の指で

腐れ朽ちた戸を叩く

火箭……

ベストラテルネン

塹壕へ、塹壕へ

静境への道

人、人

塹壕のなかをよろめく

疲れた骨を背囊が壓しつける

着物に粘土が附着いてる

灰色の容貌に鈍い眼が

誰かが蹶く、倒れる

森の墓での集合

一人の男が共同墓地で夢みる

子供の時俺はこんなに多さんのクリスマスの菓

塹壕への道

榴弾のなかを

磨つた溜水を

彼等は踏みつけて行く

穴の中に震へてる

兵隊の上を

彼等はよろめいて行く

子を望んだ、こんなにも多さん”

十四の塊りが抗道を破つた
一體それは何時だつたのだ？

昨日

動かぬ戦争

日しが槌をふるひ
お前の首を締める
意屈が血の中に入つたほど
光がうすく透らす
斃れるにもかかはらず
お前は戦争を望んでゐる

音楽會

大理石柱が発光して水晶の太い柱になつた
天井は圓天井になり星の撒布された蒼穹になる
音のあらしにひたされて

平土間は沈む、壁板は燦と燃える
人人は藁の編物の上に裸で附着く
顔が流れる、遠い夢に輝く
實りで重くなつた眼の中に分婉が旋廻する、蔽ふものなしに、空間に宿命が沸騰する

ブリストワルドの屍體

腐つた人體の糞堆
血の流れ去つたガラスの眼
さけた脳髓、露出した腹綿
空氣は屍骸のタンクに毒されてる
たつた一つの恐ろしい叫び！

お、佛蘭西の女達よ

獨逸の女達よ

お前達の夫を見ろ！

さけた手で血の流れ去つた肢體をさぐつてゐる
屍骸のやうに固い動作は兄弟のやうな呼吸となつ

た

そうだ、彼らは抱きあつてゐるのだ
お、恐ろしい抱擁！

俺は見る、見る、黙つてまゐる
俺は獸物だらうか、屠殺者の犬だらうか
汚されたるもの……
殺されたるもの……

夢魔

朽ち腐れた柱に
群集の良心が懸つてゐる
若い母の身體を破り出た三つの子供の骸骨が柱の
まはりに跳る
羊がベーベーと鳴く

人間

戦争は年ふりて幽霊となつた

骨のやうだ、その指で
輪を劃いた人民を攫む
人間はその假面を捨てた
彼等は皮紐に連ねられ
空ろな眼で媒介され
誰も兄弟に笑ひかけやうとしなかつた
誰も他人に腕を借さうとはしなかつた
言ふことは假面だつた
そんな風にして彼らは一しよに坐つてゐた
木伊乃か、蓄音機か

詩人たちに

俺はお前達を訴へる、詩人たちよ
言葉、言葉、言葉で放蕩しろ
お前達は知り乍ら灰髪頭でうなづく
微笑み、上品に渦巻く効果を考へる
お前達は臆病に紙かごにかくれてる
演壇の上に立て、被告よ

償ひをせよ！

お前達に判決を與へよ

人間學者、汝ら！

そして、在れ……？

母親達に

母親達よ

お前達の希望は、お前達の喜ばしき負擔は堀り

返へされた土の中に横つてゐる

鐵條網の間で最後をうめいてゐる

黄色い殺物の中を迷ひに迷つてゐる

歡聲をあげ戦場で荒れ狂つてゐた盲獸は狂氣に化

濃し、牢獄に入れられ、世界中をよろめき歩るいて

ゐる

母親達よ

お前等の忤がこんな事をやつたのだ

苦痛を引きづり歩るかせろ
鱈腹食はせろ、穴をほれ
悲しみに震へる腕を延ばせ
ブルカンとなれ、熾える海となれ
苦痛よ行爲を生め！

お前達の惱みは、幾百萬の母達よ

お返へされた土地の種となる

誰にもやるな
人情を

俺はお前達を抱擁した

俺は炎の手でお前達を抱擁した

言葉は血の脈うつ槍となつた

お前達をざわめく光に救ける槍に

お前達はたつた一つの輝く眼となつた

お前達はたつた一つの緊張せる手となつた

獨逸國

牢獄の格子の間から

子供らの遊ぶのが見える

狭い牢獄に閉ぢ込められ

牢獄の幾年……殉教の幾年

お、獨逸よ

お前の忤達は

長の年月

子供らと遊ばぬだらう

第二部

××の死者に

残酷な壓迫者の

結合に

頑強に抗へる

その手を熱い抱擁で抱いた
俺は俺と言つてゐるのか
俺はお前達に話したのか
太陽の周圍に彩色墮圓を描く人間
そのお前達に話したのだ
人間！
人間！

俺の牢獄の上

俺は牢獄の上に

靴の釘音が踏みつける

あちらにもこちらにも

いつまでも……

休みなく……

兄弟達、俺は叫びたいのだ

彼は俺の言葉を聞くだらうか

憂はしげに娘が身体をかがめて頭をかくす



死に捧げられた身体
くらし容貌もて
運命はお前を抹消した
路をつくる者は
敷居の所で死ぬ
しかし死を畏れて運命は
身がかがめる

愛人たちに

悲哀
それがお前達の目的でない
停滞
それがお前達の目的でない
兄弟達の心臓の血に
ひたされた
遺産がお前達には與へられた
お前達を創造する
行爲

が待つ
重く
時が
首を締める
明るい朝に
門は
開かれよ

短詩十九篇（習作）

津川公治

沙

ああ、ほんとに
生きてゐる
握りしめようとすれば
指のあひまから
さらさらと
落ちていつてしまふ沙よ
—自分
まことの詩の生命をちもふ

—一九二四—

流星

刹那に永遠を生きるとは
こんなものでもあらうか……

はつとちもふ瞬間
消えてしまつた
流星のひかりよ

おなじく

ああ、瞬間のうつくしさ
しんかんとした森のむかうに
流れて消えた
星のひかりの路よ

おなじく

いつだつたかの晩
流星が音もなく散つた瞬間にも

この森の樹木は
ひっそりと
沈黙をまもつてゐたつけよ

夜の梢

ふかい
ふかい
星空に

なんとか云つてゐるにちがひないんだが—

ああ

もくもくと

ただそよ風にゆれてゐる

夜の梢よ

おなじく

身じろぎもしない
冬の

夜の梢よ

しづかにねむつてでもゐるのか

ああ

あひまにひかつてゐる星々も

びつしよりぬらした月のひかりも

ここはどうしたつて

夢の世界だ

おなじく

みんな寝しづまつた

この冬の夜ふけだといふのに

黙々として

ひとつひとつ

星を指した

夜の梢よ

おなじく

こゝろがあるのか

ないのか

夜の梢よ

そんなにゆれて

星を散らすな

梢の星

ああ、森閑として

冴えかへつた

冬の夜の厳かさ

梢と梢のあひだに

星々がひかつてゐる

ひかつてゐる

おなじく

冬の夜ふけの

こんな寒い風にも散らないで

だまつてひかつてゐるんか

梢の星よ

冬の月夜

青い月夜の天に

ひりつと凍りついて

とほく

ひかつてゐる

梅の枯枝である

おなじく

青い空に

ひりつと凍りついた

柿の枯枝

枯枝のうへに

つめたくひかつてゐる

小さな青い月である

冬の夜

ひつそりと寒い冬の夜ふけ
たぎつてゐる鐵瓶に手をかざし
しみじみと私は思ふ――

重い足どりではあつたけれど
よくも歩んでこられたとおもふ
このひとすぢのいのちだ
みんな夢のやうだが
その夢のかずがず
いつまで経つても
忘れられない夢がさびしい

業 苦

あまりに大きすぎる慾望が
いらだてる胸をかさまはす

ああ、なやましいこのころ

ほの暗き愁の室に

(ああ、心して……)

凋みやすき花を咲かすな

永からぬ生に與へられた
いとほしきただ一すぢの生命である
このいのちを愛せよ

寂憫の嵐はいかにつよくとも

口を噤んで靜かに魂の故郷に歩みをはこべ
忍従と愛は神の深い心である

森閑としたこの冬の夜ふけ

自分はしづかに瞳をつぶつて

涯しなき闇路を行く巡禮の唄をさく
生命の泉の畔をゆく巡禮者の哀歌よ

蜻 蛉

夏の日

まひるのなぎさべに

仰むいて死せる一匹の蜻蛉

ああ、その死せる蜻蛉

波のまにまに

うきでうごけるを

悲しと思ひぬ

一九二五・八一

更 生

友よ

過ぎ去つた春の日を追憶するために

君が歩みを停むるな！

情熱と颼風のたゞ中を進め

自分達はもう鳩の魂を食ひあきたのだ

虐げられた人々の

一三、一〇一

短き人の世に生をうけて

いつまでも、いつまでも

冬の曠野をさまよふものよ

春の蘇生の聲に飢えてゐるのか

だが、今は寧ろ心して愁の室をひらけ

いちちはやく凋む命運の花に心をとどむるな

おのづからに風は杜絶え

おのづからに春の光りは萌え出るであらう

ああ、おごそかなる自然のこゝろよ

人生は美しくのろくあれ

十分に培はれて豊かに咲け

つよい大きな花弁をつけて

二度と通らぬただ一すぢの生命の道――

このいのちを愛せよ

ああ、このいのちを愛せよ

生々しい心臓の鍵

この鍵の永遠の脈動にあはせて進まう

この眞白な歯をむいて

黄金の瓦を噛みやぶらう

夜ひとひ隠惨な呻き聲にとざされてゐた牢獄の窓

から

今、曙の薄光がさしこんでゐるのだ

さあ、帽子をとれ

身にまとい苦むした襤褸をひき剥いでしまへ

素裸にならう

そして空つぼの掌に

鮮血のしたたる心臓をつかんで高くささげよ

その心臓の鳴りひびく鼓動をさけ

泣くのをやめよ

自分達はまだ若いのだ

—一九二五・五・一〇—

月

雨あがりの

月夜である

遠いむかうの方も

すぐ目のまへも

水溜りはみんな光つてゐる

ああ、この尊さよ

霜のあさ

人生といふ

生命といふ—

眼がさめて

かれんだあをめくる

わがおもひのさびしさ—

霜のふかい朝空に

煙草のけむりが

しづかに消えて行く

星

ひかつたり

さそたり

遠い、とほい

螢のやうな星である

それは

—星の吐息とでもいほうか—

かすかな

かすかな

淡い雲がかすめてゆくのだつた

ちやうど私の

心の燈臺のように

ああ、きえては

またひかつてゐる

森閑とさびしい

冬の夜ふけの星である

—一九二五・二—

前濱の夕なぎ

ああ 夕風の

このひと時

波の音はひつそりしづまつて

かなかな蟬の聲が

とほく

渚にながれてくるやうだ

月の出でもあらう

ほつかりと

裡山の端があかるんだ……

ああ 夕風の

このひと時

—一九二五、八—

トコトコが來たと言ふ

土方定一

四〇

トコトコが來たと言ふ

トコトコが朝と一しよに來たと言ふ

まんぼのやうにねむつたら

トコトコで眼が覺めたと言ふ

何だかうれしいと言ふ

―二五、五、四、那珂湊詩編

トコトコは川蒸汽のトコトコと言ふなり、まんぼは殺さるるも知らずねむると言ふ魚と言ふ

子供は死んだ

母ちゃん、母ちゃん

其の朝も子供は―

冷いミツ汁をかけて貰つて

ザブザブザブと口へ入れて貰つた

私・お前・彼

私は女の唇から

ビチャリ

穴に投げられた棺の音を聞いたのだ

一夜の中に水が出てゐた

酔ばらつた労働者よ

ブ、ブ、ブタ、ブ

滑稽で、勇敢で

悲しく朗らかな豚よ

―二五、八、三〇―

基督がお前を禮拜したさうだ

ブ、ブ、豚よ

男は死ぬまへにやつと

朝鮮人參のしつぽをせんじて飲んだ

だから土のやうに温かつたと

土

土

そしてお前が苦しめられた毛虱への

奇怪な復讐だつたのか

爆發、爆發が

これが爆發しては飯がくへぬと

水銀軟膏を買はなかつたお前だ

×

人を喰ひ、女を喰ひ、自分を喰ひ

と言つて博物館の木伊乃と踊るためではなかつた

ね、乞食

町はづれで暮方になれば蠟をく一本かつて

穴に行くびつこの乞食よ

お前の踊りが人類の嫉妬への絶望的な挑戦だつたと誰が知らう

×

私に街路で二十里もはなれてる

(Rはどちらへ行くんです)と聞いた浮浪人が

さつきすれ違ひざまハンケチをひねつた娘に言ひ

寄つたからつて

二五、六、二一

女のイボはワシにバ音を叫ばせる

女の唇邊に三つの

イボ

イボ

イボ

豚の尻みだいに食ひつきたい

イボ

イボ

ボ

ホウヅキみたいに祇愛したら

破た、チュウ、チュウ

だもんでワシの口腔はイボだらけになつちやつた

血液傳セン！ ○ヤ

イボの觸覺ⅡあいつⅡ抱擁Ⅱ血、血

イ、エ、ウ、○、ア

ナント言ふ無限あいつの同時恍惚だ

ア、バ、バ

馬鹿！

ナント言ふ……

馬鹿

爆發、爆裂彈、馬糞、爆、ババ、バババ

二五、八、二六

×

雨降り止みし夜を喚ぐ

青さ街なり

二五、一〇、一八

六號雜感

津川公治

ひろく藝術といふことは暫く別として、ただ詩といふ分野で考へて見ても、詩には二つの道があると思ふ。東洋的な調和した自然と人生の神秘的な美を象徴的に表現して行くのと、自然と人生の燃ゆるやうな生命を異常な感傷によつて直截に露骨にありのままに表出して行くのと、前者は言葉によつて自然と美の無限性を限定せず、言外に暗示的な餘韻を漂はせる、この最も代表的なものは俳句であり、近くは山村暮島の短詩などがある。そこには已に思想を超越した一種の悟得の美があつて、我々の頭や心にちかにか觸れるといふよりは、寧ろ胸奥の美感到に滲け込む。美的な氣稟をもつて情操に迫つて来る。東洋の文人詩などにはこれが多いやうだ。これに到達するには、不斷の精進教養は勿論であるが、一般に年齢がその大部分の成果を促すものである。これに反して、内に生長する生命の慾望が強いものは、どうしても思想や感興を露骨に出しがちである。ありのままの自然と人生をありのままに叫ぶ。東洋古来の藝術にはこれがあまりなかつた。近くで云へば武者氏、千家氏などがあり、西洋ではホセ・マリア・ゴッホ、ミケランジェロなどがある。ロダンなどは兩者を内にもつてゐた人だと、武者氏などは云つてゐるが、自分も、兩者は決して永遠に平行して行くものではないと思つてゐる。自分の前には常にこの二つの道がひらけてゐる。一方だけではどこか物足りない。そして内の生命が生長し切れ

は遂に幽玄なる無限に達するといふ信念を自分をもつてゐる。兩者は一つの生命の二つの現はれてゐる。自分がいま書いてゐる詩がどこかもの足りない感じがするのは、つまりここに原因してゐる。この二つの道を渾然と一つに生かされる時、自分は満足できる詩がかけるときだと思ふ。——この詩の二つの道の調和については、いづれもつと考へて書きたいと思つてゐる。

○ 自分は常に生長するもの、生長しやうと心がけてゐるものを尊敬する。一處に高くとまつて停滯してゐるものを尊敬する氣になれない草や木の生長してゆく美しさ、生々しさ。人間のぐんぐん内面的に深まり、より高い處へと生長してゆく崇嚴さ。

○ 春には青葉、秋には紅葉

凡そ樹木は實によき最初と終りをもつ。自分の一生もかくありたいと思ふ。

○ 昨日下午館の加藤君のところへ、はじめて高橋元吉といふ人の「耽視」といふ詩集を読んだ。今まで知らなかつたが、高橋といふ人は非常にいい素質をもつた人だと思つた。「傷心」といふなどは百三十頁に亘る長詩だが、一氣呵成に讀ませられてしまつた。それだけ、熱があり大きな心の動きと、深い感傷に満ちてゐた。もつと早くよんでわ

いてもいいものだと思つた。

藝術は、少くとも萬人の心に觸れる眞の藝術は、如何にもうまい思ひつきだとか、小才が利いてゐる位の程度ではいけない。自分は本道をついてゐる、と突き進んで行く藝術でなければ讃美出来ない。描がないをぐいぐいと突き進んで行く藝術でなければ讃美出来ない。描がない生命をしつと握つた一種の藝術でなければ讃美出来ない。手先の藝術が、どこかに溢み出でゐる作品でないと讃美出来ない。手先の藝術ばかり見せられたのでは、むしろ手品か魔術でも観る方がましである。本當の魂に深く喰ひ入つてゐるか、自然と人生の微妙な美に浸つてゐるかでない作品に、僕は共鳴することは出来ない。

人には古いと云はれても仕方がない、僕はやつぱりモオランよりはドストイエフスキーが好きである。僕は過渡期の一現象といふものは、いくら新時代の魅力があつても、それに安心して傍に寄りつけない傾向をもつてゐるらしい。平凡以下でない以上、僕は健全を愛する永遠性を求める。クラシツタたり得るものを尊敬する。しかしここで云ふ健全性といふのは、必ずしも鈍健を意味しない。謂はば大きく深く鋭敏なる健全性である。

○秋の二日間の汽車の旅で「不二」の十月號をよんだ。武者小路氏の「雜感」と長興氏の「小春日和」がやつぱり、びつたりと胸に來た。常に自分を堀り下げ、本道に於て自己を生かすことに實に敏感であるのが第一僕を釣る込む。

「僕は自分をたよるものを嫌ふ。自分をたよるものは僕に愛想をつかすだらう。たゞ自己を本當に生かすことを知つてゐる獨立人だけ、僕からよれるものはとり、又僕に與へるものは與へてくれるだらう。

僕は憐愍だと思ひ、少し含羞ながら言ふ、あなた方がゐてくれるので僕も生き甲斐を感じて來た。そしてますます深く、いよ／＼大きく生長して行きたい。大きな技、廣い業を悠揚とひろげたい。

そして僕は、僕を嫌ふ奴には平氣で嫌はせて然然と生きられるやうに早くなりた。二〇、一八、夜小山の旅舎にて。

○内に生長の意志を感じられない生活は僕には堪へられない。内に生長の意志を感じる時、希望がわき、悦びがあり、自信が出來、度胸がする。そして實に生き甲斐を感じる。世間が何だ、民衆が何だといふ氣になれる。そのあべこべに生長する意志を感じられず、内の生命が動きがとれずに停滞しきつてゐる時の鬱しは實にひどい。

自己を全体的に生かし切れる時の緊張した悦び
その悦びよ永遠であれ
その悦びに祝願あれ。

○しかし仕事の疲勞から來る生理的な状態と環境から來る精神的な状態のために、全力を出し切れる瞬間といふものは、僕には稀にしか與へられない。随つて、日常生活においてはまた／＼不安と焦燥から解脱し切れない寂しさがある。これはどうにもならない寂しさである。緊張した深い生活を生きたい、全力を出し切つて仕事をしたいといつても思ふ。

○自分の言ふことを悦ばうが、嫌はうが、それは他の人の氣持次第だ

四四

僕は寄生虫を生かすには貧弱すぎる。しかし獨立人の友としてはいづゝあるべき處にある。その人を信じ、又その人の生きることと親みそのために働きたがつてゐるよき友人である。僕は自分を生かすことに役立つ範圍内においてのみ他人に役立つ人間だ。

僕はそれで一個の人間はいゝと思つてゐる。
數日前僕は水戸において、武者小路氏と親しく逢ふ機會を得た。そして二人で、一晩泊りで袋田の瀧から大子に遊んだ。栗拾ひもした。その間、僕は常に一人の人間の存在をかんじてゐた。一言も文藝に關する話はかきさなかつた。しかも僕はそれで満足しきつてゐたのである。僕も、今日では友人や先輩と逢ふが早い、文藝の話を持ち出す氣持はどうやら卒業したらしい。そうして、右に抜擢した言葉がいか／＼と感してゐるのである。その上に、一個の人間の生きる道、少くも僕自身の生きる道を實にはつきりと言ひ切り、指し示してくれたかと思つて實に感謝してゐるのである。全時に、この言葉は如何に眞實であるかも知ることが出來た。獨立人の友としていつもあるべき處にゐること。これは深い永い教養と、自分及び社會に對する強い信念と、徹らざる矜持と、眞理に對する鋭い内省と、あくまで自他の生命を尊重する敬虔な魂との所有者でない限り非常に六ヶ敷い生き方である。だが、それだけ實に立派であり、拘めども盡きない豊かな人間の味をもつた生活である。謂はず、徹らず、そして謙虚で崇敬に自己を持すことのいかに大事業であるかを思ふ。

○僕の存在を悦んでくれる友達が少しづつ殖えて來る悦び

から、自分自身どうすることも出来ない。併し自分は何と云はれても自分で言ひたいことを云ふより仕方がない。云はないであらねないことだけは云ふより仕方がない。それで嫌ひなものには嫌はれるより仕方がない。だが悦んでくれるものには悦んで貰はう。自分は嫌は云ひたくない。それで獨りよがりなら、それでも仕方がない。勿論獨りよがりがないとは思はないが、八方美人はより以上自分を不愉快にするケイペル博士は小品集の扉に、ロゼツガールの「余の書く所が果して眞理なりや否やは、余これを知らず、されどそれは正に誠實なるべきなり」の一句とプラトンの「この説に同ずる者、又同ぜざる者のただ少數に過ぎざるは余の知る所なり」の一句を掲げてゐる。

思慮深い言葉である。これ以上僕が言ふべき何ものを持たう。

雜記

○此雜誌の發刊は土方、小林兩君の努力の齎したものだ。兩君が來て生沼さんや小牧さんなどのお奨めもあつたりするから是非一緒にやらうといふことになり、僕も、水戸に少しづつかりした文藝雜誌らしい文藝雜誌が一冊位あつてもよさうなものだと思つてゐた矢先のこととて、それぢやといふ譯で始まつたのであるが、何しろ創刊ではあるら、メ切も遅れてゐるので、豫定してゐた小牧健夫、吹田順助兩氏からの原稿が間に合はなかつたのはさしづめ残念である。併し日野氏のヘッセの譯、菅原氏の小説、生沼、中村兩氏の歌などを貰へたのは感謝に堪へない。號を追ふて本誌がよくつて行くのを期待してゐて欲しい。

○小川幸錢氏の「桃源」は、もと山村春島氏等と「桃源」といふ雜誌を出

さうとした頃、暮島氏から頼んで小川氏に描いて頂いたものが、經費の都合で發刊を見るに至らなかつたので今日まで保存しておいたものである。後藤兄が苦心して木版に印刷し着手刷りにしたものである。すばらしい繪である。今時に、その努力の程も、分るものには分つて貰へると思ふ。今小川氏に無断で本誌へ掲げたことを氏にお詫びすると共に深謝する次第である。

○日次カットも、後藤兄が本當に厚意をもつて書いてくれた。ここで御禮を申しておく。

○本誌に「譯詩集より」の獨逸現代詩人の譯をのせた渡邊康夫君は、今年の三月、二十六で逝つた長友である。その天分のあつた事はこれによつても想像される。尙君は生前シンドレアの「ドン底の英雄」一巻を世に送つた丈であつたが、遺稿メイスフィールド「ナン」の悲劇、「ロゼツチ」詩集自作の詩、小説等數冊が近く新潮社や英英閣から刊行される筈である。

○創刊號も大體編輯もすんで、もう半分以上版も組み終えた。第二號は更にがんばつて、一層すばらしいものにしたい。雑誌を出すからにはなくてはならない雑誌を出したい。あつてもなくてもいいものなら始めつから出したくない。春と秋と二回、實にすばらしい臨時増刊號を出すつもりだ。どんなことがあつても期待にそわかないつもりだ。自分も當分の雑誌には全力をそそぐつもりだ。

○何しろ愛讀され、信用されていゝ雑誌である。全力を出し切つて作つたものなら、いかに小さくとも、誰の前に出されても耻ぢない。定價も二十錢だから非常に安いことは誰が見ても分る。買つても損をしないとと思ふ。……書きたいことはあるがだんだん機に望んで書

之は僕一人の抱負だが、この雑誌はどうかして普通の同人雑誌と云ふ形ではなく、「早稲田文學」と云ふ様な形の下に、學校中心に永續さして行きたいと思つてゐる。別に理由があるわけでないが、その方が雑誌としての健全性が得られ易いと思ふ。

無駄な努力も多々あらうが、こんな仕事は面白い事はない。それに今度の様に、學校の先生方が御盡力して下さるのは、學生としての僕等は非常に嬉しい。我道徳的かも知れないが、弟子は矢張り、師に對しては敬びと親しみの情を切實に持たなければ駄目だ。

○先日、武者小路さんが水戸へ來た時、一時間ばかり座談をした武者小路さんは、僕が未だ中學三年の頃、神戸の雲内教會でお目にかゝつた事があつてから、ずつと好きな人の一人だ。その仕事や作品が好きと云ふよりも、その仕事をしたり、その作品を書いてゐる人自身が好だ。とにかく、自分の事を、自分で考へて、自分でやつてゐるのは未だそんな所へ行つてゐない僕などよりは、人として尊敬してもいい人だ。

僕との話しは、それを筆記して後で見て戴いたのを、前に載せてあるから、こゝでは云はないが、その對話中僕が見た人自身を少々喋らう。

身体の恰好にもよるだらうが、あまり着物の着方がうまくないらしい。色々の所を氣にし過ぎて、却て強ばつてゐるのてないかしら。殊に、湯上りなどもつと樂々にしてもよさそうに思ふ。話しが連口なのは誰にでもすぐ判る。殊に筆記してゐると判る。煙草を喫はないで

くことにする。

六號雜誌

小林 剛

○折角、水戸に集つた人達がそのまゝ、別れてしまふのは、何だか惜しい様な氣がするので、此の雑誌を作る事にした。と云ふのは僕一人の考へからではなく、生沼先生や中村先生からも御奨めもあつて、土方や津川と相談の上、かうしたものを作つて見た。

變に理屈をつければ、郷土藝術とも云ふべきものを、高等學校中心にやつて行かうと云ふのが、まあ目的と云へば目的だ。しかし、そこに集つた人が、特別に、水戸と云ふ土地に愛着を持たず、自分一個の境地に立つて、自分の藝術を作つてゐてもかまわぬと思ふ。何も窮屈にして、郷土藝術を作らねばならないと云ふ事は少しもないのだから之は又、僕等が表紙繪や口繪に、あんなものを選んで言譯にもなる。と云つて、郷土趣味がうまう出て呉れるなら、勿論嬉しいと思ふ。だから、この土地の古い事なども、段々に研究して行きたいと思つてゐる。矢張り、正しい傳統の上に立つた方が、何處となく力強い氣がする。又、多くの古人が爲した努力は、それ自身に於て存在價值があると共に、後人がそれを尊重するのは當然すぎる位の當然の事だ。勿論それを學ぶべきか否かは、こゝでは問題でない。

色々なものを食つたり飲んだりばかりしてゐるのも、身体全体がゆつくりしない原因でもあらう。のし梅を、竹の皮の間から、少しづつ切つて食つてゐるのは、普通の人の食べ方と大して變りはない。

○あの夜、武者小路さんと、もつと少人數で話したら、もつとよく色々な所を見たら、惜しい事をした。武者小路さんにして見れば、却て僕などに色々見られなかつた方がよかつたかもしれぬ。

もうとつとくに、終電車が通つてしまつた後の電車道を、下を向いたまゝ、歩いてゐるは、丁度學校生活の様だ。唯、單調だからと云ふのではない。凸凹した歩道よりは、歩き好いから、又その連つてゐる線が面白いから、離れたくはない、しかし、いくら急いでも、緩く歩いてゐる氣取つても、ぼんやりしてゐても、誰一人見て呉れるものはない。辻などで、たまに巡査が見てゐる位なものだ。世間こゝを電車が通つてゐる事を考へると、それに乗つてゐる人が、矢張り羨ましくなるその速い、安全な乗物が、今の自分の所へ來て呉れたらと思ふ。

○實社會から離れてゐると云ふので、自分のする仕事まで、實社會とは縁のないものと白眼視されるのは、僕として情なく思ふ事の一つだ。

多くさん當にしてゐた人達から原稿が戴けなくて、創刊號としては食窮なものになつてしまつたが、それは編輯者としての見方で、實吉さんのヘルマン・ヘッセや、菅原さんの創作から、又生沼さん、中村さんの和歌など、お忙しい中から玉稿がいたゞけたのは、たまらなく嬉しい。その他、渡邊さんの譯詩や、土方、津川の詩、又トルレルの

「MORGEN」等があるのは、讀者として物足りない筈はない。
挿絵も、實吉さんから土方與志さんに頼んで戴いた表現派の舞臺や
僕達が一生懸命に探したものが、四枚もあるから相當だ。繪の説明は
土方がやるから僕は書かぬ。

是は一般讀者に云ふのでなく、水高の人達に云ふのだが、前にも書
いた通り、此の雑誌は成可く學校中心にしたいから、僕等の仕事を手
傳つて呉れる人があるなら来てほしい。

三人が集つて編輯すると云ふ事は、勝手者の三人の事だから、決し
て他人の意見に妥協する事がないので、一方から云ふとやり難いが、
それをそのまま妥協せずに、三人勝手々々にやらして置けば、結構、出
來て来るから、却てそれを編輯方針とした。

挿絵解説

メルツェルについて

メルツェルはかつて彼の藝術に就て簡単に斯う云つた。余が得よう
と努めるのは——純粹な藝術——磨成された繪だ——それは外部的な
流行の議論を離れて、現代文化自身の經驗から獨立的に創られたもの
である——。この意志に、彼は嚴格に従つたのである。彼は人里はなれ
た僻村に寂しく生きてゐた。彼の發展の一方を守つて寂しく生きて
然しそれも當時の藝術家達の印象主義より表現主義への一般的な方向
轉換とは違つてゐた。

發展に負ふものであるらしい。

メルツェルの天分の、今後の發展は明かに幾つかの方向に向つてゐ
る。色彩と線とを豊かに強くすること——色彩をより暗く重くするこ
と、物象を單に表面的なるより脱せしめて、空間を把握し得るに至ら
しめること。以前にはつまり彼の繪は鮮やかな薄絹の様なものであつた
が、いまは彫塑的な濃がりが感ぜられる。より質量ある物体が前から
後方へふくらむて居る。筆を省いた表面が漸々明瞭になりつゝある模
様の以て、明るい場所を示して居ると同時に、斯の如く自然主義的手法
の加はると共に色彩は以前の様に明るくなくなつた。褐色と暗紫色、緑
色と暗青色、赤と強いオレンジ色の諧調によつて強い調和が感じられ
る。——素晴らしいオルガンの演奏の様に、その鮮やかな色彩が鳴り響く
のである。色彩も線も生々とした強さを得てゐる——アントイスの様に
母なる大地に觸れつゝ。

それらは早や裝飾的な均齊を固執してはゐない。生々として上に
下、前に後ろに動いてゐるのである。——熱狂的に天に冲する獨乙
風の精神的表現主義は、幾つかの強い効果を持つ作品の中に主權を握
りつゝある。既に「昇天」「マドンナの禮拜」等の題目が、この新らしき
方向を示してゐる。驚ろくべき怪奇な情感を帯びた美しき宗教畫を彼
は作つてゐる。しかもそれはただ、戰爭畫に於て同様に、新らしき
主義に適ふところの線の動きに他ならぬのである。色彩と熱狂とは似て
もつかぬ僧和と親しみを保つてゐる。そして明るい鮮やかな色どりを
持つ平俗な内容の作、例へば「雲雀の囀り」の如きものこそ、——最も
成功したものなのである。

しかもメルツェルの最近の作品の中に於ては、彼の元來の天才

彼の展覽會のリノリウム版畫はこの一九〇八年から一九一八年へ
の發展を示してゐる。極く初期の作品は大抵失敗してゐるが、それは
單色のもので、その Innenzeichnung は線の濃淡によつて達せられて
ゐる。——後の一九〇八から一九一〇の時期には非常な魅力と美し
さがある。色と色は軽く重なり合ひ、素晴らしい明るさと喜びとは、非常
に明るいチューリップの花の煙を人に微笑みながら考へさせる。そ
の前幕の様な微光の中に、愛や物の表面がチムメルやグイオリンの音
で書き込まれてゐるのである。この初期の作品の色彩は人物や物体の
表面を總て同じ調子で満してゐる。——ただ陰影は不明瞭な効果を持
つ暗さで示されてゐる。だから黄や緑や紫の行爲が、優美な輕快さで
背景にといふよりバラ色の表面に動いてゐるのである。

人は知らずしらず、應用美術的の句を感じる。そして、彼が二十七
歳の時で、陶器の土繪を描いて居つたこと、後ライマールのルード
ウィヒ・フォン・ホフマンの門に入り、やがて（一九〇九）ベルリンに
次にパリに移つて、其處で一九一二に展覽會を開き、遂に一九一三
年獨逸藝術家協會（D.D.R.）から、グイラ・ローマ賞を受けてから
暫くフローレンツに居ることが出来た事を思ひ起す。彼の初期はだか
ら應用美術から三様の影響をうけてゐる。裝飾的の感覺を持つオース
トリア人であることによつて、——次に應用美術的繪畫によつて生活
したことによつて、最後にホフマンの影響によつて、ホフマンの作品
は美しい曲線に特に興味を示してゐるからである。メルツェルがこの
始めの狀態に停止しなかつたのは、ベルリンの苦い空氣や經驗に對し
て常に新たな感激を感じるパリ生活の態度に、而して最後に次第に
勢を増してあらゆる藝術家を風靡しつゝある現代文化の表現主義への

は見逃がし難く表れてゐる。靜かな美に對する藝術意志が——裝飾的
應用美術から表現的自然主義への彼の發展の背景として。——エツカ
ルト「獨逸の表現派の文化と美術」から——

ゴッガンについて

ゴッガンは繪畫を生きたる有機体とみる一新したる方面を彼獨自の
法則の一つとして打建てた。そして、印象的文割にしたがつて、その
色彩を再び彼獨自の價值にまとめる綜合手段をした。彼ゴッガンに
よつて、フランスの新運動の大部分がその影響をうけた。ヴァン・ゴッ
ホの影響はそれから後になつて來たものである。彼が印象から表現に
至る道を驚くべき程短縮したことは——たとひ印象主義のあるものの
中に、最近停滯したものがあるにしても——同時に當然裝飾的結果
を齎した。次第に進んで來た印象主義の様式の中に、何等のミツテル
といふものを見ず、自己の精神的慾求に適合すべき誘惑から脱出する
やうになつた程、新時代に對して各方面に、彼の生存したといふ力は
強く大きいものであつた。このオランダ人の感化力は、少くとも、新
藝術觀の一元索であつたし、今でもそうに違ひない、人は何ともし
て彼の中に見出さうとしてゐる。假令人が、獨自的研究をしてゐて
も、ゴッガンのやうに、外物に對して——即ち單純にして複雑なる、
そして擴大されたる價值に、また新しく偉大なるものへの慾望に對し
て、而もそれらの端著が、とくに幾分か畫家の中に（藝術家の中でな
い、動いてゐると感じてゐるにしても。——ポール・フェビターの「表
現主義」から——

水戸三濱間直通乗合自動車

午前七時四十分より三十分毎に水戸驛
前より磯濱、大洗、湊、平磯に發車す

フォード自動車特約販賣店

本橋自動車商會

水戸驛前 電話水戸八三三番

運動具一式

東亞堂代理店
加島屋代理店

小山運動具店

水戸市上市南町二區

マスク
ブレイク面型について

これは千八百〇七年ブレイクが五十歳の折に、骨相學者Devlieがとつたものである。ブレイクは嘗て「相貌のないところに性格はあり得ぬ」又は「光を發せぬ顔は星にはなれぬ」とも書いた。彼は彼の獅子鼻が基督のそれと同じ型である事を云つた。彼は又自分の顔をソクラテスにも比べた。然も誰も之を見る時、不思議にも、ブレイクと同年に死んだベートーベンの面型を聯想しないものはないであらう。——柳井俊氏の解説から——

○土方が挿繪の解説を受持つたので、その積りでまかせておいたところ、編輯の際になつて急に盛目にやられて終つてしまつたので、今月號の解説はやむを得ず不完全のまま載せてしまつた。併し來月號からは遺漏なくやつてもらふつもりだから、讀者諸兄妹に、こんどだけ勘辨をねがつておく次第である。

○後藤兄は、相變らず水戸市外谷田村山莊に籠つて、日本の彫刻界なんか相手にせずに獨りてこつ／＼鑿を振つてゐる。十月二十八日から一週間縣公會堂に開かれた白牙會の繪畫展覽會に四點出品した。無暗に人に好かれるやうな作品でないが、その價値は、目のある人には一大驚異であらう。自分も一人の本當の彫刻家の友をもつてゐる。同兄はそれから毎月カッソその他を畫いてくれる約束になつてゐる。

(十月二十六日夜、津川)

毎月一回一日發行(本號定價二十錢)

五〇

定價表

普通	壹部	金貳拾錢	郵稅
特別	壹部	金五拾錢	郵稅
半年分	(普通號五册)	金壹圓四拾錢	郵稅共
壹年分	(普通號拾册)	金貳圓七拾錢	郵稅共
特別號貳部	(金貳圓七拾錢)	郵稅共	

◆誌代はすべて前金御拂込の事
◆代金引替は一切謝絶す
◆郵券代用は壹割増の事

大正十四年十月二十五日印刷納本(創刊號)
大正十四年十一月一日發行

編輯兼 津川 公定
發行者 小 林 剛一治
印刷所 水戸市上市南三ノ丸 柴 博
印刷所 水戸市上市南三ノ丸 弘 文
發行所 水戸市下市荒碑町 彼等自身社
【注意】廣告料拂込壹頁拾圓

最新流行洋服

水戸高等學校指定

玉造洋服店

水戸市上市銀杏坂

帽子

水戸高等學校指定

各官衙學校消防指定

三好帽子店

水戸市上市泉町廣小路

書籍

新刊圖書

文房用具

水戸市上市南町二區

知新堂書店

繪葉書便箋

かるたトランプ

小供洋服

水戸市上市泉町二丁目

井上えはがき店

水戸名産

梅羊羹

水戸の梅

井熊本店

水戸市上市南町三丁目
電話三〇五番

新刊圖書雜誌
文房運動具

水戸市上市泉町二丁目
書肆 川又書店

電話(四七番)・電略(カワ)
振替(東京五四四一番)

新刊圖書雜誌
高級文具
万年筆の御用は

水戸市上市泉町二丁目
平野書店

電話 一六六番
振東三一五六七番

會澤先生原著 清水正健先生 校閱 皆川二郎氏譯著
栗田 勤先生

國民
之必
讀書

新論譯註 新論と現代

菊版二六二頁
肖像墨蹟二葉
和裝美本
定價金壹圓八拾錢
送料金拾貳錢

目 次

新論譯文(總振假名付)、新論(原漢文)、註釋、會澤先生墓表(譯文付)、
著書名、詩歌鈔 新論と現代(如實觀と現代化、新論と其時代、新論
と國體觀、先生の對外觀)
右は水戸學の精髓、國體學の權威にして、國民の士風を振作更張せる雄
篇新論に對し精確詳蜜の註解を加へたるものにして大正國民の必讀すべ
き教書なり。

〓〓本書は市内各書店にて販賣す〓〓

發行所 水南 戸丸ノ三 弘文社 東京 日新社

大正十四年十月二十日印刷
大正十四年十一月一日發行

(每月一回一日發行)

彼等自身 創刊號

定價金貳拾錢
(郵稅貳錢)